

日本グループ・ダイナミックス学会会報

ぐるだいにユース

発行所／福岡市中央区天神一丁目西日本新聞会館十四階

集団力学研究所内・日本グループ・ダイナミックス学会

発行人／三隅二不二 編集担当／黒川正流

1992年7月20日
第0号

四十回を迎えるGD大会

名古屋大学で十月に開催

回顧と展望、特別記念講演に大物登場か

張り切る大会準備委員会（原岡一馬委員長）

日本グループ・ダイナミックス学会の第四十回大会は十月四（日）、五（月）の両日にわたって名古屋大学教育学部で開催される。準備委員長は原岡一馬教授。事務局長の長田雅喜教授はじめ総勢二十二名の中京地区会員が準備委員会となって鋭意お膳立てを整えている。

五月二十日に締め切られた発表申し込みは、三十分の発表と十分の質疑討論で構成されるロング・スピーチが八件、十二分発表三分質疑のショート・スピーチが五八件。パネル発表は二九件。この他発表区分の記載のない申込が二件届いているので、個人研究発表申し込みは九七件に達したことになる。ワークショップの企画申し込みは三件である。

ちなみに東北福祉大で行われた平成三年度第三十九回大会のプログラムによれば、ロングが十件、事後のパネル説明を伴うショートが七二件で、計八二件であった。その前年の関西大学の大会プログラムはロング二一件、ショート五八件（他に特別プログラム）であったから、会員の知的生産性は年々上昇傾向を示しているようである。

特別企画として講演とシンポジウムが

予定されている。準備委員会は「国際化時代におけるリーダーシップ」の演題で中京地区出身の大物政治指導者に講演内諾を得ているが、突発的な日程の変動もあり得る立場なので公表は大会3号通信のプログラムまでお待ちを、と原岡委員長も慎重な姿勢。

四十回記念行事をも兼ねたシンポジウムのテーマは「グループ・ダイナミックス研究の回顧と展望」。決定した話題提供者は以下の通り。（敬称略）

○集団研究の立場から―蜂屋良彦（神戸大学）、○人間関係訓練の立場から―津村俊充（南山短期大学）、○組織における人間関係研究の立場から―古川久敬（九州大学）、GD研究の問題点と方向づけ―末永俊郎（帝京大学）、○企画・司会―原岡一馬（名古屋大学）

会員相互の交流と情報交換の場として（安価に飲み食いしながら）若い会員からの期待も高い懇親会は初日夕刻、名大構内の生協南部食堂で行われる。当日会費は一般四五〇〇円、学生（院生を含む）三五〇〇円。名古屋名物かしわ（とり肉のことを当地ではこう呼ぶ）ときしめんがGD発展の活力となりそう。

発表申し込み者には既に第二号通信として論文集原稿用紙等が発送済みであり、全会員に大会プログラムが届けられるのは九月上旬の予定となっている。発表を申し込まれた方は論文集原稿必着期限の七月末日をお忘れなく。

常任理事会が大会四十回記念企画

本学会の大会の歴史を辿れば、昭和二五年に当時の小倉市堺町小学校で第一回が開催された記録がある。（三面参照）今年の大会が不惑の四十回を迎えるにあたって、準備委員会が記念シンポジウムを企画しているが、これと並行して常任理事会でも企画が検討されている。詳細は大会準備委員会との協議を経て決定されるが、わが国のグループ・ダイナミックス研究の発展を振り返る対談や展示、学会発展の礎となった方への謝意の表明などの行事が検討されている。

第三回研究奨励賞選考委員会委員決まる

GDと関連領域の研究と奨励に資するための「研究奨励賞」の選考委員会委員の選挙がこのほど本学会理事によって行われ、十名の委員が選出された。委員選挙内規により、選考委員は留任できないことになっており、二年ごとに新しい委員が選ばれている。この十名に「実社会研」編集委員長が加わり、互選によって中村陽吉氏が委員長に選出された。今期の委員はつぎの諸氏である。

（敬称略）委員長・中村陽吉、三隅二不二（編集委員長）、安藤清志、古畑和孝、原岡一馬、狩野素朗、永田良昭、佐々木薫、佐藤静一、関文恭、高田利武。

「研究奨励賞」は一九八五年の大会総会（早稲田大学）で承認を得て創設された。当該年度の「実験社会心理学研究」誌に掲載された三十五歳以下の著者（共著者はこの限りでない）による論文が受賞対象になる。発表は大会総会で行われ、今回が第五回目である。

◆北海道社会心理学研究会

「ライラック、アカシアの花も終わり、今はサツキが満開です」という大坊理事からのFAXを基に紹介します。」

一九八八年春に発足した北海道社会心理学研究会は会長や役員や規則もありませんが、原則として月一回程度、これも原則として北海道大学篠塚研究室で続けられています。

主たるメンバーは、北大はじめ札幌市内の各大学の社会心理学系研究者や大学院生（時には学部生も）、それに旭川や長万部など道内各地の研究者も参加しています。大坊理事は「北海道は広いのでなかなか限なくとはいきません」と言いながら、機会ある限り札幌以外の同学の研究者にも参加を呼びかけておられる様子です。

実社心研の合評会は年二回程度で、このときは北海道在住の全GD学会員に連絡がとられ、常連メンバーに加えて多数が参加することになるとのことです。

例会では毎回レポーターを一人決め、自分の研究に関する話題提供とそれへの質疑というスタイルが定着しています。レポーターの発言量を一とすると他のメンバーの発言量がその三、四倍になるという毎度の活況は、会費五百円でケーキを食べたりワインを飲んだりしながら楽しく進められる会の運営方法に帰属されるようです。

最近とりあげられたテーマは、社会的ジレンマに関するシミュレーション、外見の魅力の効果、説得的コミュニケーション、意思決定などのことです。

▽問合せ先：電011-891-2731(内線463) 大坊まで

◆東北グループ・ダイナミックス研究会

【突然の慌ただししい電話取材に快く応じて下さった大淵先生からのFAXによって紹介します。】

東北地区のGD学会のメンバーを中心に「東北グループ・ダイナミックス研究

会」と称する社会心理学者の集まりが定期的に行われています。月一回が目標ですが、現実には様々な制約もあって実際には二月に一回くらいの頻度になっています。

本年度は四月十八日に第一回が尚綱女学院短大で同短大の水田恵三氏を世話人として行われ、青森中央短大の川瀬隆千氏が「感情・記憶・自己」、東北大学の織田信男氏が「ボランティアの活動危機」と題して発表されました。

六月二十日の第二回は東北福祉大の堀毛一也氏を世話人として、東北福祉大蔵王山荘での泊りこみ研究会が行われました。発表者と演題は、東北大・潮村公弘氏「何をもって偏見とみなすか」、堀毛一也氏「恋愛関係の発展と崩壊に関する追跡研究」でした。参加者は十名前後でした。

本年度は「実社心研」の合評会はまだ行っていないが、年に一度はそのための会を開く予定です。

▽問合せ先：電022-222-1800(内線2539) 大淵まで

◆日本GD学会関西フォーラム

【京都大学の杉万俊夫氏に前回の様子を聞きました。】

日本グループ・ダイナミックス学会関西地区研究会は今年はまだ行われていないが、昨年までに六回開催されている。

昨年行われた第六回は四人の関西地区理事（廣田、木下、三隅、白樫の各氏）の呼びかけで、杉万俊夫氏を世話人として十一月十二日に京大会館で開催された。

当時フルブライト研究員として北海道大学に滞在中のデラウェア大学教授D. M. Kuhlman氏がSocial Orientationにつ

いて講演し、終了後は氏を囲んで約三十名の参加者がパーティ形式で語り合った。今後の予定は確定していないが、開催の際には関西地区会員を中心に案内することになっている。

▽問合せ先：電075-753-652(直通)、杉万まで

◆名古屋社会心理学研究会

【精力的な研究会活動を年間五、六回開催している名古屋社会心理学研究会の状況報告は、大会準備で忙しい原岡理事からのメモと談話を基に十一月以降の活動をまとめます。】

仙台での学会が終わった直後の昨年十一月九日の第三回では名大広瀬幸雄氏がポストン・カレッジでの、十二月二日の第四回では中京大奥田秀

各地で活況・工夫もさまざま

地域別合評会・研究会

ワインにケーキ、宿泊、ビルの屋上……

宇氏がデラウェア大学での体験談が披露され、現地の授業・研究事情が紹介された。

三月の第五

回では名大伊藤哲司氏と三重大吉田俊和氏がそれぞれ実社心研三二巻二号の自著論文について発表した。会員四五名のうち毎回二十数名から三十名が参加し、気心の知れた研究仲間ながら活発な質疑応答と白熱した議論が重ねられている。

本年度は四月と五月に開催され、それぞれ名大大学院の中村和彦氏の「態度が意思決定に及ぼす影響過程に関するMODEモデルの実証的研究」と森久美子氏の「社会的ジレンマにおける信頼感と協同行動」という修士論文の実験結果が報告され、討議が行われた。

▽問合せ先：電052-781-5111(内線2647) 原岡まで。

◆広島実社心研合評会

広島大学では、平成二年から月一、二回のペースで、社会心理学研究者有志による実社心研合評会が行われている。通常は土曜日の午後二時間程度を割いて、最新の論文二本が紹介され、それについての討論が行われる。中心は実社心研論文であるが、紹介者の関連分野によって心理学研究や社会心理学研究の論文が取り上げられることもある。現在の常連メンバーは総合科学部の神山貴弥、坂田桐子、黒川正流、青山和雄、教育学部の植田智、有倉已幸、木村巖弘、原田耕太郎らである。比較的少人数であるためか、あるいは大学院生中心ということもあってか、毎回全員参加の活発な討論が繰り広げられ、予定時間を過ぎることもしばしばである。最近の社会心理学諸分野の研究動向や各人のテーマ等にまで話題が広がり、議論はつきない。

さらに、年末・年始・夏場には「合評会夜の部」が設けられることもあり、ビルの屋上や座敷でアルコール片手に昼の部の続きが行われるのである。(坂田記) 問合せ先：電083-241-1221(内線2144) 神山まで。参加歓迎！

●【編集部より】日本グループ・ダイナミックス学会の活性化を意図して発足した地域別合評会・研究会はご覧のように各地で盛んです。ここ数年間活動を停止している地域もあるようです。ここに紹介した地域以外で研究会合が行われていましたら、ぜひ編集部または学会事務局に状況をお知らせください。

地区理事の責任で開催される研究会や講演会（地域別研究会）については、責任者の申請があれば、会員への案内のための実費（主として郵送料）が学会から補助されます。また、地域別会員宛名ラベルについても要請があれば事務局で準備することが出来ます。詳細は事務局におたずねください。

実社心研の論文が世界の読者に!

APAにコピー・サービスを承諾

アメリカ心理学会 (APA) の学術情報部門 PsycINFO から本学会に、同部門のデータベース利用者を対象とする文献コピー・サービスに実社心研掲載論文を供用したい旨の申し入れがあり、本学会は六月二十日の常任理事会でこれを承諾して協定を締結した。

実社心研の文献情報は、これまでも PsycINFO の CD-ROM による情報サービス商品 PsycLIT と同オンライン・データベースにアブストラクトと索引が収録されていたが、今回の協定により APA は利用者の要求があれば実社心研掲載論文一編全体のコピーを有料で配布す

ることが可能になる。なお、この協定は論文の著作権に影響を及ぼさない非独占的なものである。コピー一編は八ドルから十ドルで、一割が学会に支払われる。

JNEUSD 実社心研英文号

「実験社会心理学研究」三三巻の英文号 (一九九三年春発行予定) への投稿は今がチャンスです。

投稿した論文がうまく審査をパスしても活字になるまで一年以上を要するのは常識になった感のわれわれの研究分野ですが、The Japanese Journal of Experimental Social Psychology の次回号については六月末現在で掲載待ち論文が三編しありません。

実社心研英文号は、わが国のグループ・ダイナミクス研究の実情を広く諸

外国に紹介するという目的をもち、一九九〇年三月に二九巻三号として一回目が刊行されました。掲載論文の内容はオリジナルに限定されず、過去の実社心研に掲載された日本語論文で国外に紹介するにあわしいものも含まれます。

これまで二九巻に原著、資料、書評併せて計九編、三十巻三号に同じく計八編、三三巻三号には計八編が掲載されています。したがって三三巻の掲載可能スペースには今のところ余裕があるわけです。年度内発行の日程からみて審査期間を考慮すると、八月末までに投稿される論文は掲載の可能性が大と言えそうです。

GD学会史資料を探しています!

敗戦直後の学問研究の復興期に発足した日本グループ・ダイナミクス学会が不惑の年を迎えました。常任理事会では別記のように第四十回大会を記念する行事を企画していますが、そのために学会創設当時の資料を探しています。たとえば発表論文集が事前に配布されるようになったのは比較的最近で、以前はガリ版刷りの資料集などが工夫されていたそうです。とくに時代を限定しませんが、研究発表のプログラム、会場案内、資料集、参加者名簿、参加者や会場の写真など、当時の状況を知る手がかりをお持ちの方は学会事務局にご連絡ください。

日本グループ・ダイナミクス学会大会 (総会) 40回開催の足跡
(人名は大会委員長)

第1回	1950. 5.20	小倉市堺町小学校	三隅	二不
第2回	1952. 5.25	大分大学学芸学部	首藤	貞美
第3回	1954. 1.23	九州大学教育学部	平塚	益美
第4回	1954.10.30	佐賀大学教育学部	池田	貞美
第5回	1955.10. 8	長崎大学学芸学部	武藤	雪下
第6回	1956.11.22	福岡学芸大学	大吉	賀一
第7回	1959.11.18~19	長崎市西海荘	伊藤	喜好
第8回	1960. 7.15~16	早稲田大学	牛島	安二
第9回	1961. 7.29	愛育研究所	廣田	義友
第10回	1962. 7. 9	関西大学	松村	君美
第11回	1963. 9. 3	お茶の水女子大学	永丘	康平
第12回	1964.10.10	甲南大学	矢野	俊介
第13回	1965. 7.14	東京理科大学	伊吹	山太
第14回	1966. 7.11	京都大学教養部	辻	正三
第15回	1967. 7.18	東京都立大学	佐々木	薫友
第16回	1968. 7.25	関西学院大学社会学部	牛島	義友
第17回	1969. 8.25~26	青山学院大学文学部 (八王子大学セミナーハウス)	三隅	二不
第18回	1970.10.16~18	九州大学教育学部 (日本犯罪心理学会8回大会・日本社会心理学会11回大会と共催)	橋本	仁司
第19回	1971.9.26	専修大学 又城一郎・中野繁喜 (専大伊勢原セミナーハウス)	久保	良敏
第20回	1972. 8.20~21	京都府立大学 (記念大会) (京都国際会議場)	塩田	二不
第21回	1973.10. 2	早稲田大学 (全国勤労青少年会館サンブラサ)	三末	永俊
第22回	1974.10.11~12	広島大学総合科学部	篠原	しのぶ
第23回	1975. 9. 1~ 2	名古屋大学教育学部	永田	良昭
第24回	1976. 9.25~26	大阪大学人間科学部	猪股	登留
第25回	1977. 9. 5~ 6	東京大学文学部	中村	陽吉
第26回	1978.10.12~13	中村学園大学	廣田	君美
第27回	1979. 9.18~19	学習院大学文学部	正田	良豆
第28回	1980.11. 2~ 3	島根大学法文学部	蜂屋	良彦
第29回	1981. 9.15~26	東京女子大学文学部	橋本	仁司
第30回	1982. 7.10~11	関西大学社会学部	小川	一夫
第31回	1983. 9.10~11	立教大学文学部	岡村	二和
第32回	1984.10.10~11	神戸大学文学部	古畑	田君
第33回	1985. 7.23~24	早稲田大学教育学部	廣木	村進
第34回	1986.11.23~24	広島大学教育学部 (日本社会心理学会27回大会と共催)	原岡	一馬
第35回	1987.10.10~11	専修大学 又城一郎・中野繁喜		
第36回	1988.10. 6~ 7	福岡教育大学		
第37回	1989.11.25~26	東京大学文学部		
第38回	1990.11.24~25	関西大学社会学部		
第39回	1991.10.26~27	東北福祉大学		
第40回	1992.10. 4~ 5	名古屋大学教育学部		

注:会場を括弧書きしていない年度の会場は主催校の校舎

以前の大会プログラム等をお持ちの方は事務局にご連絡ください。

七百目入会はいっつ?

GD会員数までもなく突破!

本学会の会員数は六月十五日現在で六八一名に達し、七百名を越えるのは時間の問題となった。入会申込者は月例の常任理事会で審査され、入会を認められた人の会費納入が事務局で確認された時点で会員となる。常任理事会にはこのところ毎回四、五人から十数人の入会申込みが続いている。六月二十日の第二回理事会でも四名の入会が認められており、本人の入会手続きが終了すれば会員総数はさらに増える。

一方、退会の申し出は毎年数名あり、会費満了時点で名簿から削除されることになっている。このほかに退会の意思表示がないまま数年間連絡のとれない若干の会員がいて、事務局は取り扱いに苦慮している。

グループ・ダイナミックス研究の発展と普及を目指している学会としては、学会活動活性化のための会員数拡大の目標をとりあえず千名にしている。学会組織が拡大充実すれば、学術行政や学術会議等に対する本学会の影響力も増大し、財政基盤の確立によって機関誌その他の会員へのサービスも向上し、国際的にも権威ある学会として研究交流が促進されることになる。会員諸氏にはぜひ同学の士を新会員に勧誘していただきたい、と会長はじめ理事一同からの要望。

ちなみに、所属会員数の多い研究機関のベスト・テンは六月末日現在でつぎの通りである。

- ①広島大学・二二名、②東京大学、名古屋大学、関西大学・各一七名、⑤愛知学院大学・一五名、⑥学習院大学・一四名、⑦早稲田大学・一三名、⑧北海道大学・一名、⑨京都大学・一〇名、⑩九州大学・九名。

会員の多い都府県は東京、愛知、大阪、福岡、京都であるが、福井と和歌山の二県は会員のいない県である。

役員改選をひかえ

会員名簿の更新すむ

自分の事項の確認をお忘れなく

今年は選挙の年、といっても参議院選挙のことではなく、本学会の役員改選の年である。現在の理事二十名と監査二名の任期は平成二年十一月二十六日から本年十月五日の大会終了日までであり、規定により九月末までに郵便による選挙が完了しなければならぬ。

投票日前三カ月以内の会員名簿によって選挙台帳が作成されるため、役員改選の年は会員名簿更新の年でもある。事務局ではすでに会員一人一人への異動の問い合わせを行って回答を締め切ったが、例年になく所属や住所の変更回答が多く、名簿は大幅に改訂されるもよう。

ハガキによる回答が返ってこない会員の事項は前回の名簿どおりに掲載されるが、この中には実際は異動していて、機関誌はじめ事務局からの連絡が途絶えている人も少数ながら含まれている。

所属や住所の変更通知はついつい滞りがちなもの。きちんと届けて会員の特権をキープしてください。

編集後記

*会員と理事会・事務局、会員相互のコミュニケーションの場としてニュース・レターを発行することになりました。これはその試作号の第0号です。

*もともと掲載したい記事は、会員の研究活動に有用な情報と一人一人の会員の動向と意見おしゃべりと提言などです。

*「実社心研」の編集進行状況・新入会員の紹介・理事会での審議事項など、実社心研の学会彙報をこちらに移して、そのぶん学術論文の掲載スペースを増やしたら、という意見と、ニュースレターだと記録が散逸するから彙報には不適だという意見があります。

*合評会での論文批評と著者の反論との紙上討論を試みたいのですが、スペースが……お知恵を貸してください。また、

事務局の紹介

GD学会の礎をきずいた人は誰かといえど内情を知っている人は、誰でも三角恵美子氏をあげるでしょう。彼女の学会に対する貢献は筆舌につくしがたいものがあります。

さて、今度三角さんの協力者として高崎栄子さんが学会の事務局を担当することになりました。今、GD学会のことを日々、真剣に考えている人、それは高崎さんでしょう。

高崎さんは昨年からGD学会の事務局を担当し、現在はそれを一手に引き受け、会員の増加を喜び、会費の納入状況にため息をつきながら頑張ってくれています。会員の皆さんの中には彼女の手書きによる会費納入のお願いを受け取られた方があると思います。

高崎さんの熱い思いがGD学会を支え、「実社心研」の3冊刊行にこめられています。高崎さんはそんな熱意の人です。

【会長 三隅二不二 記】

実社会の現場で見つけたGDの応用など、形式は問いませんので情報を編集部にお知らせください。

*というわけで、本紙の内容や形式やいろいろな点についてのご意見をお寄せください。郵便なら「千七三〇広島市中区東千田町一広島大学総合科学部黒川研究室」、電話なら「082-241-1221内線2387」 FAXなら「082-241-5170黒川宛」 BITNETなら「A020115@JPNHROA.bitnet.jp」。

*正直なところ、B4版表裏の会報編集なんて簡単さ、となめていたことを懺悔します。本業の傍ら一人で二ヶ月もかけてこれだけです。学会報の先輩紙、社会心理学会会報やJAOP ニュースなどの編集部に深甚なる畏敬の念を捧げながら、第1号はもっとよいものに努力します。

【会報編集担当・黒川正流】